



国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は十九ページまでである。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. この試験時間は六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	

(一) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

現代社会の一つの特徴として、人間と動物との距離が以前よりも急速に狭まってきているという事実をあげることができるように思う。

たとえば、アニマル・ライツ(動物の権利)の考えからすれば、人間と他の動物とにたいし、その権利主体として異なった扱いをするのは種差別(スピーシズム)だとして非難されねばならない。そのため、医学や製薬のために実施される動物実験においては、その実験の必要性や当該動物に与える苦痛の軽減など、厳格なガイドラインがもうけられることになっているし、卑近な話題としては、南水洋で行っている日本の調査捕鯨が野蛮で残酷な殺戮行為だとして、シー・シェパードなど西洋の動物保護団体から公海上で襲撃されるという事態も起こっている。

ア、アニマル・セラピー(動物介在療法)が認知症患者をはじめとするさまざまな精神疾患に多くの効用をあらわすなど、医療や介護の現場における動物たちの重要な役割が日に日に高まっている。

このように、かつて厳然として存在していた人間と動物のあいだの隔壁かくへきが、さまざまな領域で大きく崩れ出しているのである。

イ、そのさい気づくのは、それらの動きがたとえば上述のアニマル・ライツやアニマル・セラピーの名称からも明らかのように、ほとんどが西洋社会に由来する思想であり実践であるということではないだろうか。言い換えると、近年の現象として人間と動物との距離が縮まっているのは西洋社会発の特異な問題であって、決してユニバーサルな現象ではないと理解することも可能だろう。要するに、この問題は科学の問題であるよりも文化の問題だと考えたほうがよさそうだということである。

このついでにまた日本の調査捕鯨から材料をひろってみると、水産庁のもとで調査捕鯨を実施している日本捕鯨協会では、毎年調査船団の出港に合わせて鯨供養祭を行うのが近年の恒例になっているという。一連の行事には協会関係者はもちろん水産庁の幹部も出席して、日本の伝統的な食文化を守るためにも調査捕鯨がいかに大切であるかを力説してきた。

想像するに、^a そういう日本人独得の人とクジラの暮らしに根ざした心情的な共感が、鯨供養という宗教的な伝統となつて現代にまで伝えられているのだという主張がそこには込められている。

あらためて言うまでもなく、その種の心情はさらに露骨に、次のようなナシヨナリスティックな主張として、いろいろな場面で頻繁に繰り返されてきたところだ。いわく、

——西洋人は鯨油獲得という営利目的のために捕鯨を行ったから、それ以外の部分は無駄に捨てて当然だと考えてきた。だが、日本人は鯨の油だけでなく肉も皮も骨も余すところなくすべて利用し、その一部たりとも無駄に捨てることはしなかつた。だからこそ、そのように人間の暮らしに役立つてくれるクジラに感謝し、彼らのために墓を建て、供養の気持ちをあらわしてきたのである。そのような日本人の古くからの伝統と信仰に根ざした捕鯨といういとなみは、鯨油の必要性がなくなるやいなや過去の利己的な所業に類被りして反捕鯨キャンペーンに走る西洋諸国のものとは根本的に異なる文化なのであり、彼らの手前勝手なジャパン・バッシングには断固として対抗しなければならぬ、と。

このような理解を一つの典型例として、人間の利益のために自然界を利用し破壊してきた西洋文化とはちがつて、日本人は古来「人間と自然の共生」を実現してきたという俗耳（そそじ）に入りやすい文化ナシヨナリズムが多く日本人に共有されている。しかも、そうした西洋／日本での対自然認識の相違を論拠とする日本文化論は、現在でも盛んに量産され、少なからぬ賛同者を得ているのである。

ウ、少し冷静に考えるなら、日本人が「人間と自然の共生」という二十世紀終盤以降の理念を古代や中世の時代からすでに持ち合わせていたと考えるのはいかにも非現実的であろう。

I

詳しく述べる紙数はないが、鯨供養の始まりを説明する言い伝えとして西九州や紀伊半島など近世期に捕鯨のさかんであった地域で語られてきた「はらすみクジラの願いごと」というタイプの話を参照すれば、そこにはまったく別の要因が存在していたことがわかる。

工、近世の捕鯨者のあいだでは子連れクジラを捕るのを忌む慣わしがあつたというが、その理由については次のように説明されることが多かつたからである。

II 僧などの夢に美しい女が出てきて、次のような願いごとを告げる。すなわち、自分は妊娠中のクジラで出産のため明日この浦の沖を通るが、どうか無事にお産をさせてほしい。もし願いどおり助けてもらい、南の海で子どもを産むことができたなら、帰りにこの沖を通るとき必ず捕られるから、と。しかし僧はこのことをクジラ捕りたちに知らせることをせず、孕みクジラは殺されてしまった。するとその浦では疫病がはやって死人が続出したり、一人も赤ん坊が生まれなくなるという災いが起こって、これは例の孕みクジラの祟りにちがいないと思ひたり、鯨供養を鄭重ていじゆうにいとむようになったというのである。

たとえ生活のためとはいえ、クジラをはじめとする生きものを捕らえて殺す行為は、当の生きものの祟りを引き起こさないではない。人間の手にかかつて生命を落とす生類は必ず怨みの心をもつて死んでゆくものであり、その怨みの心が原因で振りかかってくる報いを回避するために、当の人間は何らかの償いをしなければならぬ。そういった功利的なギブ・アンド・テイクギブ・アンド・テイクの感覚が、ほかならぬ鯨供養の発端にあつたことは否定できないのである。「孕みクジラの願いごと」の話は、そのことを端的に教えてくれているではないか。

III 往々にして「自然にやさしい日本人」の証拠のように言われる鯨供養の伝統が、じつはそれほど単純なものでなかつたことは明らかであつて、日本人の仏教信仰の代表だとされる供養の観念の背後には、もともと妬みや怨み、祟りといった負の心情がわだかまつていたことを決して忘れてはならないのである。

また、そのような日本的な供養のいとなみは、動物・植物といった自然界における他者、そして人間の死者という同胞他者にたいする畏怖や恐れおそれの感情と切り離せないものであることを理解しておくべきなのである。

IV

^b あえて単純化して言うなら、西洋では人間の優位を前提とした自然(動物)の利用や管理・保護を基本としてきたのにたいし、日本でのそれは自然(動物)への畏怖や恐れゆえに両者の妥協や協調が模索され、そこからさまざまな観念や習俗が生み出されてきたと考えられるだろう。

オ、その両者のありかたのどちらか一方がすぐれていて、どちらか一方が劣っているなどということはない。両者いずれもが、おのおのの環境と生業の相互作用から成るながく複雑な歴史過程のなかで構築されたところの、人間と自然(動物)の關係にまつわる観念や実践の総和であつて、それ以上でもそれ以下でもない。

V

やや公式的に言えば、そもそも人間とは本来的に自己の周囲の自然環境(基本的には動物と植物)に何らかの介入(狩猟と農耕・牧畜)を行い、それを操作・改変することによつて食料を持続的・安定的に確保する方法を案出し、みずからの生存の基盤を固めてきた。そして、そのような志向と行動がやがて一定のシステムとなり、それぞれの環境に応じた生業の形態とそこからみちびきだされた所有や分配の仕組みが選ばれていったのであつた。さらに、そうした一定の生業基盤のうえに編成された共同体や社会において、その秩序の存続と維持を剥き出しの暴力によつてではなく、成員間の内面的な同意を通じて遂行していく人間のいとなみとして、個々の文化が形成され、一定の世界観やコスモロジーをともなつた宗教が成立してきたと言えるだろう。

次に、このような自然と人間のかかわりの総体を考えた場合、とくに注目されるのは、個々の動物や草木など植物にたいする「殺し」をともなう操作・改変の行為を、そのような自然界全体にたいする人間の負債の感情として受けとめる観念の形成のありようではないかと思われる。言い換えるとそれは、野生の動物、植物、あるいはもう少しひろく、「大地」にたいする人間の介入行為と、それがもたらす「負」の感情を、人びとが日々の生存のなかでどのように了解し、どのように正当化していくかという問題である。そしてその課題を引き受けるものとして、文化や宗教の役割を考えることが必要であり、先述した近年の西洋と日本との自然保護運動や動物観の相違も、根本的にはそこに根ざす文化や宗教の相違という地平から理解されなければならないはずである。

そう考えた場合、これまでしばしば指摘されてきたように、その相違を一神教と多神教の違いとか、特定の教祖の教義にもとづく創唱宗教とそれをもたない自然宗教との違いから理解することが通例であった。そうした宗教類型論や比較宗教学の成果が大筋で間違っているとは思わないが、しかしややもするとそういうとらえかたが、知らず知らずのうちに先述のような浅薄な文化ナシヨナリズムに墮してしまふ危険は少なくない。

その危険をまぬかれる方法はいまだ見出されていないが、それを補う方法として興味深いものは、それら異質な宗教伝統の背景をなす A に着目し、その具体的なありかたと宗教的世界観や神観念とのつながりを丹念に解きほぐしていく作業ではないかと思う。そしてそういうユニークな実りを予見させる一例として佐原真による「食用畜産文化」と「非食用畜産文化」の相違についての指摘は傾聴に値する。

ここでは、東アジアのなかの大陸、あるいは朝鮮半島におけるような食用畜産用の家畜をもつ文化圏と、沖縄や北海道をのぞいた日本本土のように、食用家畜をもたない文化圏とが比較対照され、農耕のためにのみ家畜を飼育し、それを食用とすることにたいへん強いタブーを課している日本本土のありかたに焦点があてられる。すなわち、言語のみならず種々の文化要素において高い共通性をしめす朝鮮半島と日本本土とのあいだで、とりわけ動物とのかかわりにおいてきわめて対照的な相違が存在していることが、具体的な事例を通じて明らかにされるのである。

たとえば、朝鮮半島が大陸部と共通してもつ家畜飼育にかんする慣行・習俗のうち、家畜の内臓を食べること、その血を飲むことなどは日本では潔癖に拒絶され、また動物供犠の儀礼もほぼ全面的に消滅していること、あるいは家畜飼育のための必須の技術である去勢きよせが日本では知られておらず、またその人間への応用である宦官かんがんという制度も朝鮮半島どまりで日本へは導入されなかったことなど、数多くの選別と意図的拒絶の事例が存在するというのだ。

従来も、このような動物をめぐる文化の相違が日本本土と朝鮮半島とのあいだに明確に存在することは気づかれてきた。しかしそれは、極端な場合はそれぞれの民族の本質に根ざしたものととして先験的に理解され、またそうではなくても、遊牧・牧畜民的文化と農耕民的文化的の本質に由来する相違として、多かれ少なかれ固定的に理解されてきたのである。佐原の指摘の貴重な点

は、それら「食用畜産文化」と「非食用畜産文化」の相違を民族や宗教といった **B** 概念に関係つけて理解するのではなく、そこに見出される個々の歴史的・文化的な事象群に即するかぎりで理解しようとする態度であろう。言い換えると、重要なのは民族や宗教を実体化してとらえることではなく、環境や生業の具体相に即して歴史と文化の内容を地道に見極めていく謙虚さなのである。

いずれにしても、佐原が朝鮮半島や大陸部と日本本土を対比するなかでとりだした「非食用畜産文化」の内容は、決して「自然にやさしい日本人」や「自然と共生する日本文化」に直結するものではない。だいたい日本本土が朝鮮半島や大陸部と違って「食用畜産文化」をもたなかったとしても、それは古来より日本人が動物を食用にしなかったということを意味しない。冒頭で述べたクジラの例だけでなく、日本人は多くの水生魚類を食用とする「魚食文化」を育ててきたし、シカ・イノシシほかの野生獣を筆頭におびただしい鳥類や虫類までも日常食のなかにとりこんできた歴史をもっている。そういう一面をことさらに無視してしか成立しえない ^d「自然にやさしい日本人」や「自然と共生する日本文化」のイメージは、かぎりなく作為されたイデオロギーだと見なさざるをえない。

(中村生雄「信仰のなかの動物たち」による)

問一 空欄 **A** **く** **オ** に入る最も適切なものを次の中から一つずつ選び、その番号をマークせよ。ただし同じ番号

を二回以上使わないこと。

- 1 だが
- 2 いっぽう
- 3 したがって
- 4 ただ
- 5 なぜなら

問二 傍線 a「そういう日本人独得の人とクジラの暮らしに根ざした心情的な共感」と無関係なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 クジラを捕るのは日本の伝統的漁労文化であるという日本人の思い。
- 2 クジラを食べるのは日本の伝統的食文化であるという日本人の思い。
- 3 あますとことなく利用してきたクジラを大切に思う日本人の気持ち。
- 4 生活に大いに役立ってきたクジラに対して感謝する日本人の気持ち。
- 5 怨みの心を持って死んでいったクジラの祟りを恐れる日本人の気持ち。

問三 傍線 b「日本でのそれは自然(動物)への畏怖や恐れゆえに両者の妥協や協調が模索され、そこからさまざまな観念や習俗が生み出されてきた」とあるが、現代の日本に見られる観念や習俗で、そうして生み出されてきた観念・習俗と考えられるものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 人間活動の影響で絶滅の危機に瀕している動物は手厚く保護しなければならないという観念。
- 2 人間に危害を与えたり人間を恐れさせたりする外来種の動物は駆除してもかまわないという観念。
- 3 大切に飼われ天寿をまっとうして安らかに亡くなったペットの供養という習俗。
- 4 新薬開発のために犠牲となった実験動物のために行う供養祭や慰霊祭という習俗。
- 5 捕らえられた動物を山野や池沼などの自然に放つ放生会ほうじょうえという習俗。

問四 傍線c「浅薄な文化ナショナリズム」の内容を説明している部分を本文中より五十六字で抜き出し、その最初と最後の三文字づつを記せ。

問五 空欄 A に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 宗教と文化
- 2 慣行と習俗
- 3 環境と生業
- 4 自然と人間
- 5 一神教と多神教

問六 空欄 B に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 上位
- 2 同位
- 3 下位
- 4 具象
- 5 集合

問七 本文中からは次の一文が脱落している。入るべき場所は、本文中の I ～ V のどこか。次の中から最も適切なものをつ選び、その番号をマークせよ。

そもそも、日本の仏教に特徴的な死者供養の伝統の根底には、妬みや苦しみをもちつつ死んでいった、いわゆる浮かばれない死者たちを仏教の論理を応用して安らかな死者に転換しようとする目的があったと指摘されている。

- 1 I
- 2 II
- 3 III
- 4 IV
- 5 V

問八 傍線d「〃自然にやさしい日本人〃や〃自然と共生する日本文化〃のイメージは、かぎりなく作為されたイデオロギーだと見なさざるをえない」とあるが、それはどうしてだと筆者は考えているか。筆者の論旨に照らしてふさわしいものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 朝鮮半島が大陸部と共通してもつ家畜飼育にかんする慣行・習俗のうち、家畜の内臓を食べること、その血を飲むことなどは日本では潔癖に拒絶され、また動物供犠の儀礼もほぼ全面的に消滅しているから。

2 日本本土が朝鮮半島や大陸部と違って「食用畜産文化」をもたないことは、古来より日本人が動物を食用にしなかったということの意味するから。

3 動物をめぐる日本人の伝統的な民俗信仰の習俗からして、日本人が古くから現代のアニマル・ライツに似た考えを持っていたことは間違いないと考えられるから。

4 日本人は自然(動物)にたいして強い畏怖や恐れ感情をもっていたとしても、それは決して自然(動物)へのやさしさでも自然(動物)との共生志向でもなかったから。

5 人間の様々な目的のために犠牲になつて死んだ動物の供養や慰霊行為の一部には、自然界にたいする畏怖や恐れ気持を何らかの方法をつうじて中和・軽減しようとする志向が存在しているものもあると考えられるから。

問九 鯨供養を行わなくてはならない気持ちになる日本人の感覚とは、どのような感覚なのか。本文中の言葉を用いて二十五字以内で記せ。

(二)

次の文章を読み、後の問に答えよ。なお、文中に筆者独特の語彙使いや表現があるが、原文を出来るだけ尊重した。

学校をやめて売文を業とする様になつてから、日常の明け暮れにうつかりしていられないと云う事をセツジツイに感じる。それは何の商売渡世であつても、当り前の事とは思ふけれども、永年の月給暮らしが癖になつていたので、馴れないからなお更氣を遣う様でもあり、実はそれを承知しながら、日日の規律と云うものがないのを幸い、気がついて見れば昨日も一昨日もその前の幾日も何もしなかつたと云う様な事が時時思い出した様に気になるので、それで事新らしく、こう云う生活では油断をしていてはならぬと大袈裟ロに考えるのかも知れない。

別に怠けると云う程のつもりはなくても、少し机に塵が溜まると、すぐに身の廻りに応えて来る。日当りがわるいので、家中は晴雨に拘らず一日じゅう冷え冷えしているから、朝から晩まで瓦斯暖炉ガスを焚き続ける。台所で十銭ずつ機械の中に入れただけの量の瓦斯が燃える仕掛けになつていたので、時々すうと薄くなつたり、又はいきなりぽかんと云う音がして消えたりする。来客と話し込んでいる時に、急に辺りが寒い様と思つて、振り返つて見ると暖炉の表が暗くなつていて、「瓦斯アが消えたよ」と云つても、襖ふすまの向うで埒うちの明かない気配である。それで、そうかさつき入れた十銭がお仕舞だつたのかと思ふ事もある。

A 客なら十銭貰つて入れるけれども、相手によつてはそうも行かない。大分籠もつて居る様だから、暫らく消しておきましようトと云う様なことにしてその場を糊塗こまする事もある。一軒の家に十銭の金もない事を信じないらしい人が世間に沢山いそうトで忌まましい。

某氏を訪ねると小さな瓦斯暖炉が気持よく燃えているので、大変出がいい様だと褒めたところが、「払いがいいからですよ」と云つた。この冗談は「B」と云う意味に邪推する事が出来る。

「払いがいいと云つても、月末までは借りておくのでしよう。私のところでは、即金どころか先払いをしている」「どうするんですか」

それで十銭瓦斯の説明を試みた。お金を入れてから燃え始め、それから何時間か続くのである。つまりその初めの時に即して

云えば、まだ使っていない瓦斯代を先払いした事になる。

「しかしその時間が過ぎると、すうと消えかかるので、あわてて十銭入れると、忽ち新らしい焰が勢いよく燃え出すから、当てつけた様で癩にさわります」

「面白そうですね」

「いや面白くはない。現金なものですと云うその言葉通りだから不愉快です」

「しかし後で払う面倒がなくていいでしょう」

「後の事よりもその時に困る場合が多いので」と云いかけて、家の瓦斯がそう云う装置に変わった行きさつを思い出したから、いい加減で話を切り上げた。瓦斯代が二三ヶ月たまって、話が面倒になった揚句に、会社の方からこう云う機械をすすめたのである。

しかし十銭ずつ入れて温まっているのも、趣きがあつて悪くない様でもある。私の祖母は、お金は阿弥陀ほど光るとよく云つたが、私は十銭の白銅と云う物はよく燃えるものだと感心して焰の昇るのを眺めている。

家の中は、土間の隅から押入れの奥まで、すべて私の支配するところであると考えていたけれども、台所の戸棚の中に一ヶ所だけ、私の処置を拒む所がある。その中に十銭の白銅が幾つたまっているか解らない。小遣に窮し煙草を買うにも不自由し出すと、ちらちらとその中の事を考える。大体一ヶ月目ぐらいに、瓦斯会社から洋服に板草履を穿いた男がやつて来て、台所の板の間に上がり込み、戸棚の中に首を入れて、何処かをがちゃがちゃと云わせているうちに、びっくりするほど沢山の白銅を摺み出す。冬の間の幾月かは大概十何円に達している様である。あまり数が多くて計算できないものだから、二寸よりもっと高い棒の様に白銅を積み重ねて、それを幾本も板の間に列べる。その頭を指先で敲いて一い二うと勘定している。あんなにあつたかと思ふのも忌まじしいが、丁度お金がなくて、差し当りの少しだけでも何処かでどうにかしなければならぬと考えている時に、白銅の塔を倒して、じゃらじゃらと袋に入れて持って帰るのを見ると、怪しからん様な気がする。一部シジュウを見物していた気疲れで、その男が帰った後はがっかりして暖炉の前に帰り、欠伸をしながら考えて見る。一体あの金はこちらで預かっている

のであろうか。そんな筈はない様に思われる。一旦がちゃんとした以上は、後はもうこつちの知った事ではない。無遠慮に持つて帰るところを見ても、そう云う理窟になつて居る様に思う。うちの台所の戸棚の中に、己の金ではない金が大分ある筈だと云う事を、人に触れて歩きはしないけれど、もし泥坊が這入つて来たらどうしようかと考え込んだ。私のところに生憎お金がなく、泥坊の見込と違ふ為、話が六ずかしくなつた時、そつと教えてやつてはいけなうか。苟も泥坊ならば、その位の箱をあけるのは何でもないに違ひない。その場合、悪者は泥坊にきまつて居るが、損をするのは私ではない筈である。泥坊から云えば、私の金を盗んで行くも瓦斯会社の金を盗んで行くもお金の味は同じであろう。私から云えば、その金を泥坊が持つて行つても瓦斯会社の集金人が持つて行つても、台所の戸棚の中らなくなると云う点に変わりはない。寧ろ戸棚の中になくなつたとか、まだ貯まつて居るとか云う事さえも私には関係がないのである。どうなつたところで、あの中には燃やした滓がたまつて居るに過ぎないと考えたら少し気がらくになつた。こう云う事を考え込んで居る暇に早く原稿を書かなければ又火が消えてあわてなければならぬだろうと、急に気を張つて見たけれど、まだ何か考え残した事がありそうで、これからすぐに文章を書くこと云うような気持になれなかつた。

(内田百閒『大貧帳』による)

問一 傍線イ、ハのカタカナを漢字で記せ。

問二 傍線ロ、二の読み方をひらがなで記せ。

問三 空欄 A に入る最も適切な表現を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 気のおけない
- 2 気をつかう
- 3 気にとめる
- 4 気をもむ
- 5 気がある

問四 空欄

B

に入る最も適切な表現を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 あなたの瓦斯暖炉の設備はすばらしいから暖かいだろう
- 2 あなたのところは払いが悪いからよく燃えないだろう
- 3 わたしのところは瓦斯会社にお金を振り込んでいるのだよ
- 4 わたしの瓦斯暖炉は即金で支払いを済ませているのだよ
- 5 あなたとわたしのところでは、料金の支払い方は同じなんだが

問五

傍線 a 『瓦斯が消えたよ』と云つても、襖の向うで埒が明かない気配である」とあるが、この部分の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 わたしが、瓦斯が消えたと言つても、子供たちにはどうしていいか分からない様である。
- 2 わたしが、瓦斯が消えて来客に失礼だからと考えても、妻は客がいるとは気づいていない様である。
- 3 わたしが、瓦斯が消えたと言つても、妻には十銭のお金がなくどうしようもない様子である。
- 4 わたしが、来客に見栄を張っていると考えた家族は、筆者のわがままを聞かない様子である。
- 5 わたしが、家族の事を考えて言っているのに、妻や子供たちはどうしていいか分からない様である。

問六 傍線 b「現金なものですと云うその言葉通りだから不愉快です」とあるが、この部分の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 地獄の沙汰も金次第ということわざがあるように、あの世まで金次第だと言うのは不愉快だ。
- 2 利害によつて簡単に態度や様子が変るといふ表現の通りで、瓦斯暖炉に馬鹿にされたようで不愉快だ。
- 3 何事も手早く事を行うことが、金以上の価値を生むという意味なら、愉快ではないが理解はできる。
- 4 瓦斯代が払えず、そのために家の瓦斯装置を変えたいきさつを思い出して、不愉快になった。
- 5 会社の集金人が、家の主人以上に特権を持って、現金を数えて持ち去ることが不愉快である。

問七 傍線 c「泥坊の見込と違う為、話が六ずかしくなった時、そつと教えてやつてはいけなだろうか」とあるが、この部分の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 泥坊が、金がこの家の人のものか、瓦斯会社のものかわからない時、会社のものだと教えてやりたい。
- 2 泥坊が、戸棚の奥にわたしの金が沢山あることを知らないで探している時、ある場所を教えてやりたい。
- 3 泥坊が、金を探している時、この家に金がないことを教えてやつたほうが、お互いに怪我をしなくてすむ。
- 4 泥坊が、戸棚の奥の金が誰のものかわからないで迷っているとき、誰のものでもないと教えてやりたい。
- 5 泥坊が、わたしに危害を加えぬうちに、戸棚の奥にわたしのものではない金があると教えてやりたい。

(三) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

ある商人、さんにおいて三貫目の銀子をおとすによつて、札を立ててこれをもとむ。その札にいはく、「此かねを拾ひける者のあるにおいては、我に得させよ。その褒美として、三分一をあたへん」となり。然に、ある者は是を拾ふ。我家に帰り、妻子に語つていはく、「われ貧苦の身として、汝等を養ふべき財なし。天道これを照覧あつて、給はるや」とよろこぶ事かぎりなし。しかりといへども、この札のおもてを聞きていふやう、「その主すでに分明なり。道理を枉げんもさすがなれば、この銀を主へ返し、三分一を得てまし」といひ、かの主がもとへ行て、そのありやうを語る所に、主俄に欲念おこつて、**A**のかねを難澁せしめんがため、「わがかねすでに四貫目ありき。持ちきたれるところは三貫目なり。そのままおき、汝はまかり帰れ」といふ。かの者愁へていはく、「我正直をあらはすといへども、御辺は無理をのたまふ也。詮する所、守護職に出て、理非を決断せん」といふ。

さるによつて、二人ながら糺明の庭にまかり出る。かれとこれとあらそふ所決しがたし。かの主、誓断をもつて「四貫目ありき」と云。かの者は、「三貫目ありき」と云。奉行も理非を決しかねて、伊曾保に「糺明し給へ」と云。伊曾保聞きていはく、「本主の云所明白なり。しかのみならず、誓断あり。真実これに過ぐべからず。しかれば、此かねは、かの主のかねにてはあるべからず。其故は、おとす所のかねは三貫目なり。拾ひたる者に、これをたまはりて帰れ」とのたまひければ、その時本の主おどろきさわぎ、「今はなにをかつつむべき。此かねすでにわがかねなり。**A**の所を難澁せしめんがため、私曲を構へ申なり。あはれ三分一をばかれないあたへ、残りをわれにたべかし」と云。その時、伊曾保笑つていはく、「汝が欲念乱れがはし。今より以後は停止せしめよ。**B** 汝につかはす」とて、三分二をば主に返し、三分一を拾ひ手にあたふ。その時、袋を開いて見れば、日記即ち三貫目なり。「前代未聞の検断なり」と人々感じ給ひけり。

(仮名草子「伊曾保物語」による)

〔注〕さん…地名。

難渋…与えたり、貸したり、返したりするのがとどこおること。

守護職…刑事事件などを審理し判決する公の機関

誓断…誓約

伊曾保…西洋の古典『イソップ物語』の作者とされる人物、イソップのこと。紀元前六世紀頃のギリシアの人。トロイア戦争で捕えられ、奴隷となったが、英知と才覚によつて自由の身となった。

私曲…自己の利益だけを考へて行ふ不正なくらみ。

日記…事実の記録。内容明細書。

問一 傍線 a「や」と同じ意味の「や」を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 妹が袖 別れて久に なりぬれど 一日も妹を 忘れて思へや
- 2 「あはれ、いと寒しや。」「今年こそ生業にも頼むところ少なく、いと心細けれ。」
- 3 ほととぎす 鳴くや五月の あやめ草 あやめも知らぬ(「物事の筋道もわからない無我夢中の) 恋もするかな
- 4 天の川 水さへに照る(「水までも照るばかりに色鮮やかな) 舟泊てて 舟なる人は 妹に見えきや
- 5 御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせ給ふ。

問二 傍線 b「さすがなれば」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 やはりどうかと思われるので
- 2 とはいふものの良い事だと思われるので
- 3 やはり欲しいと思う気持ちが強いので
- 4 なるほどもっともだと思われるので
- 5 いかにも予想通りなので

問三 二箇所の空欄

A

には文中にある漢字二文字が入る。文中からその語を抜き出せ。

問四 傍線 c「真実これに過ぐべからず」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 真つ赤なウソである
- 2 真実とはできすぎている
- 3 ウソはこれだけである
- 4 真実にはおよばない
- 5 まことに真実である

問五 傍線 d「われにたべ」の意味を記せ。

問六 傍線 e「停止せしめよ」とあるが、何を「停止」するのか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 糺明
- 2 誓断
- 3 欲念
- 4 無理
- 5 理非

問七 空欄 B に入る最も適切な語を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 しかのみならず
- 2 さらば
- 3 しかるに
- 4 しかりといへども
- 5 あまつさへ

問八 傍線 f 『前代未聞の検断なり』と人々感じ給ひけり』とあるが、人々が感心した理由は何か。次の中から、最も適切なものを一つ選び、その番号をマークせよ。

1 伊曾保は、「拾ひ手」のウソを見破り、拾った銀の三分の二を「本主」に返し、「拾ひ手」は、高札どおり三分の一しか受け取れないと裁断したこと。

2 伊曾保は、「拾ひ手」の正直さに感動し、「本主」がウソをついた罰として、高札と反対に「拾ひ手」に三分の二の銀を与えるように裁断したこと。

3 伊曾保は、「本主」と「拾ひ手」のどちらにも一理あると考え、両者が話し合つて、拾った銀の取り分を相応に決めるように言い渡したこと。

4 伊曾保は、「本主」の主張をまず認め、それによれば落ちていた銀は「本主」のものではないと裁断する事によって、真実を明らかにしたこと。

5 伊曾保は、「拾ひ手」の言い分に真実があると認め、「本主」がウソをついた罰として、袋にあった三貫目すべてを「拾ひ手」に与えたこと。

問九 仮名草子『伊曾保物語』より作品の成立時期の遅いものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 好色一代男

2 住吉物語

3 曾我物語

4 海道記

5 古今著聞集